

(S. 17. 11A3)

技術的判斷の勝利

青 山 士

八紘爲宇の理想實現に向つて、先づ我日本が大東亞諸民族の指導者の位置に就くに當つては、國家總力の充實強化を必要とし、従つてその一方面として船舶の關門海峡滯なき通航と、本土、九州間の交通運輸の迅速圓滑が益々強く要求せられたのである。此時に際して關門國道隧道の導坑は大なる感謝感激を以て昭和十七年五月三十一日に貫通した。これには皇軍の將兵が大御稜威の下大東亞戰爭の赫々たる戦果を獲得しつゝある様に、己を知り敵を知り、夫れに對する備を爲すと道が貫通したのである。これに依て本隧道の穿進せらるべき個處の地質、地層、湧水狀況等を目のあたり精査することが出來、工事實施計畫、地質、地層、湧水等に對する對策、方法、準備を決定することを得て、本隧道工事竣成の確信を得たのである。これは確に技術的判斷

同時に、相當なる冒險と犠牲とを伴ふことを覺悟せなければならなかつたのである。即ち本工事を起工する前に其隧道の通過すべき土地の地質調査が必要であつて、試錐調査、電氣探查法其他の方法が擧げられたのであつたが、結局最も原始的ではあるが最も確實なる、然し相當の冒險と犠牲とを豫期せざるべからざる、日本の肉彈斥候の方法が採用せらるゝことゝなつて「たぬき掘」調査隧道穿鑿が推進せられ、相當なる危険を犯し犠牲を拂つて昭和十四年二十六日遂に其他質調査隧道の勝利としてひそかに欣快とする處であると共に、茲に其實施の衝に當られて大なる危険に曝され多くの犠牲を拂はれたる各位に對して、深甚なる感謝と敬意とを捧ぐる次第である。

(筆者—元内務技監)